

調査結果では、対象科目の履修者数は51,877名、回収数25,637名、回収率49%を示し前回調査（2020年度）の回収率54%に比しやや低率であった。はじめに、今期の授業形態は、「対面のみ」12.2%、「対面+遠隔」19.7%、「遠隔リアルタイムあり」14.9%、「遠隔オンデマンドのみ」52.9%、「その他」0.3%の比率であった。「対面」以外の何らかの遠隔授業が87.8%であったと言える（表1①～⑤）。

全質問項目Q2～Q24は、評価値（3.69）から（4.60）の範囲内にあり前年度比では、項目により増減が見られる。特に顕著な違いは「Q15.自己学習の時間を確保した」がここ数年は2を下回っていたが2020年度は（3.96）、2021年度は（4.07）と大きく上昇している。「Q14.よく出席・参加した」については、「強くそう思う」「そう思う」を合算すると96.1%になり評価値（4.60）と高い評価である。それに反して「Q13.積極的に意見や質問をした」は例年と変化はなく2020年度（3.56）、2021年度（3.69）と低値である。

2021年度の総評としては、自己学習の時間が大きく伸び、出席参加も良いが「積極的に意見を言ったり質問をすることはしない」という従来の学生像に変化はなかった。「Q24.授業の総合的満足度」は、2020年度の平均評価（4.22）から（4.37）へと（0.15）ポイント上昇した。図1に2012年度～2021年度までの推移を示す。

遠隔授業で配慮しなければならないことは、課題の多さ、理解度に合わせた授業の進め方、質問や意見に対応する、学生・教員のコミュニケーション、わかりやすい資料の工夫、オンライン環境やテクニック、成績評価の問題等があるが、それらは次項にまとめた。

図1 総合満足度の推移



1) 教員の授業設計と運営について

教員の授業設計と運営についての質問項目は、Q2 から Q12 である。

①知的刺激

学生の知的好奇心を刺激し学習に取り組む意欲を起こさせる教授内容については、「Q3. 内容は知的刺激に富んでいた」(4.40)、「Q4. 新しい知識・技術を学べた」(4.48)、「Q6. 教材(配付資料、動画、音声、パワーポイント)が理解に役立った」(4.36)、「Q11. 運営時間、学習量が適切だった」(4.25)と概ね高い評価であった。知的刺激によって「Q17. さらに勉強したくなった」についての評価平均値は前回(4.12)よりやや高くはなったものの(4.21)にとどまった。そのことから、授業中に受けた知的刺激が学習意欲を十分に引き出すまでには至っていないように思われる。

②方法・スキル

教授方法・スキルについての質問項目はQ2、Q5 からQ10までである。それぞれの評価平均値を見てみると、「Q5. 学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(4.18) (2020年度は4.05)であり、年々わずかに上昇している。「Q6. 教材が理解に役立った」(4.36)、「Q7. 説明がわかりやすかった」(4.25)であり、評価されているように考えられる。また、授業方法によっては課題ともいえる「Q12. 教員の熱意を感じた」(4.35)、「Q8. 質問できる時間や環境があつた」(4.24)「Q9. 質問への対応が適切だった」(4.20)、「Q10. 出席確認の方法が適切だった」(4.39)と概ね評価されている。教員が授業スキルの向上を意識していることが窺える。

③授業の進め方

教員の授業の進め方について学生がどのように評価しているかは、2つの質問項目の評価平均値、「Q2. シラバスに沿っていた」(4.37) (2020年度は4.25)、「Q.11 運営時間、学習量が適切だった」(4.25)と、概ね評価されていると推測できる。

④主体的な学びの促進

大学での学びにおいては学生が自ら学び、考える姿勢を修得することが求められる。しかし、大学のユニバーサル化が進むにつれて、目的意識が希薄で主体的に学ぼうとする学生が少なくなったと指摘されることが多くなった。今回のアンケート調査では受講者の主体的な学びを引き出す質問項目と考えられるのは、「Q3. 知的刺激に富んでいた」(4.40)、「Q9. 質問に適切に対応した」(4.20)、「Q13. 積極的に意見や質問をした」(3.69)であり前年度比においてやや上昇しており、概ね主体性の喚起はできていると思われる。主体的な学びに欠かせない自己学習の時間であるが2019年度

以前の調査では、評価平均 2 に届かなかったが 2021 年度は、「Q15. 自己学習時間」(4.07) であり 2020 年度 (3.96) に比べても高くなっている。これが学生の主体的な学びに直結しているかは判断できないが考慮する一因にはなると考える。主体的な学びを導く学習環境のひとつの要素として、授業において教員の熱意が受講者に感じられるかどうかがある。担当する教員の熱の入った授業は、受講者にとって強い刺激を与えるものであり、教員にとっても学生の「Q12. 教員の熱意が感じられた」かどうかは、最も関心を払わなければならない質問項目であろう。この点で、「Q12. 教員の熱意を感じた」の評価値は 2019 年 (4.31)、2020 年度 (4.26) とほぼ横ばい状態であり、2021 年度は (4.35) であった。対面以外の授業形式では難しい課題であるが総じて肯定的な評価が下されていると見なすことができる。

2) 出席率の高低群と授業評価について

次に授業への出席・参加の高低による授業評価の差について[表 2]に示す。対比項目は「Q3. 内容は知的刺激に富んでいた」「Q5. 理解度に合わせて授業を進めた」「Q6. 教材 (配付資料、動画、音声、パワーポイント) が理解に役立った」「Q7. 説明がわかりやすかった」の 4 項目である。結果は、4 項目すべてにおいて出席参加率の高い学生は教員の授業方法スキルについて高い評価を下している。また、Q5 及び Q7 は遠隔授業での難しさもあるが昨年に比べ若干低下していた。出席・参加率の低い学生は 4 項目すべて平均評価 4 にとどかず昨年度比でもすべて低下している。

授業への出席・参加率の高い学生において「Q3. 知的刺激に富んでいた」は出席率の低い群 (3.87) に比し高い (4.42)。それは主体的な学びへと結びつきやすいと考えられるのに対して、出席・参加率の低い学生では、主体的な学びをはじめ、知識定着の学びにつながっていない可能性がある。本学では「きめ細かな指導」を教育の柱のひとつとして掲げ、出欠調査等を通じて欠席しがちな学生への指導を継続して行ってきた。また遠隔オンデマンド等では参加状況を把握し参加の悪い学生には個別に参加を促している。遠隔授業は学生にとって出席しやすいという利点もあるといわれるが本学での出席改善につながっているのかは課題である。

表 2 出席率による評価

評価項目	出席・参加率が高い群	出席・参加率が低い群	差
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	4.42	3.87	0.55
Q5.理解度を考慮しながら授業を進めた	4.20	3.60	0.60
Q6.教材(配布資料、動画、音声、パワボなど)が理解に役立った	4.38	3.85	0.53
Q7.説明がわかりやすかった	4.27	3.70	0.57

3) 受講者の状況別授業満足度

①受講者数との関係

受講者数と総合的満足度の関係を明らかにするため、500科目について受講人数区分毎に満足度の平均点を[表3]に示した。この満足度評価については、学習効果を学生自身の「満足度」で測定することの意味について議論が必要なことに加え、今回の解析に関しても探索的なものであり、最終的な評価をするためには別途詳細な解析が必要ではあると考える。30人未満と150人以上のクラスにおいて、満足度が平均値を大幅に上回り、30人～150人未満のクラスでは、全体の平均値に収束している。

表3 受講者数と満足度

受講者数	11人～	20人～	30人～	50人～	100人～	150人～	合計平均
科目数	176	164	306	297	67	19	1029
満足度	4.55	4.44	4.34	4.33	4.33	4.48	4.39*

※…満足度は小数点第3位以下を四捨五入としているため、それぞれの平均が必ずしも*とは一致しない。

特に、受講生が100人以上の科目はそれ以下の科目よりも対象となる科目数が少ないため、単純に比較するには注意が必要である。もっとも、受講人数の多いクラスでは、学生の満足度いかに関わらず、きめの細かい指導ができにくくなることも事実であり、授業における指導の有効性といった観点から見れば、受講者数は少ない方が好ましいといえる。受講者数が50人を超えた場合、むしろクラスサイズそのものよりも、教員の講義内容や教授法によって満足度が左右される可能性も考慮する必要がある。これまでの、歴年授業評価において、満足度に与える因子は、受講者数や次に述べる教員の年齢・職位、学生の出席率といった単純な指標では説明できない可能性が高く、授業評価結果については、個別の授業の特性を考慮したミクロな視点も欠かせないであろう。

②教員の職位・年齢との関係

教員の職位・年齢と満足度との関係は[表4]のとおりである。単純に全体平均値だけを見ると、教員の年齢が低い程平均値が高く(39才以下4.53)、年齢が高くなるほど満足度が低くなる傾向がある。教員の年齢と授業の満足度の相関を試みた結果、統計的に負の相関を認めた(相関係数は-0.356で、危険率1%)が、相関係数の値としては比較的低値である。本学における授業評価アンケートの結果から、学生の満足度には教員の年齢や職位だけではない、他の因子も関係していると思われる、少なくとも、「教員の年齢が高くなると授業の満足度が低下する」という短絡的な結論を出すことには慎重になるべきである。

表4 職位・年齢と満足度

	教授	准教授	講師	助教	非常勤	全体
～ 39 歳		4.49		4.53	4.55	4.53
40 歳 ～	4.37	4.40		4.42	4.32	4.37
50 歳 ～	4.31	4.35	4.51	4.61	4.39	4.37
60 歳 ～	4.36	4.08	4.21		4.31	4.30
全 体	4.34	4.32	4.36	4.50	4.36	4.37*

※…特任は各職位に含む。容員は非常勤に含む。オムニバス科目の満足度は含まない。

※…表内各項目は小数第3位以下を四捨五入しているため、それぞれの平均が必ずしも*とは一致しない。

4) 授業形態別による評価

①授業形態について

前項では形態にかかわらず授業評価全体の総括をおこなった。そして、評価全体としては前年比で著しく変化した項目は殆ど見られなかったが、「自己学習時間を確保した」は例年より高値になり、「積極的に意見や質問をした」は低値のまま変化はなかった。2021年度は授業方法が、面接授業、遠隔オンデマンド、遠隔リアルタイム、オンラインと対面の組み合わせといったハイブリッドな授業展開となった。

次に授業形態別に見た授業評価についてまとめる。2021年度の授業形態は、「対面のみ」12.2%、「対面+遠隔」19.7%、「遠隔リアルタイムあり」14.9%、「遠隔オンデマンドのみ」52.9%、「その他」0.3%の比率であった。「対面」以外の何らかの遠隔授業が87.8%であったと言える。

②学科別の授業形態比率

[表5]に示すとおり、全体的には授業形態として多かったのは遠隔オンデマンド、対面と遠隔、遠隔リアルタイム有り、対面、その他、の順であった。多くの学科で遠隔オンデマンドが首位であったが、服飾造形学科は対面のみが首位であった。また共通科目(外国語)、看護学科、国際学部といった遠隔比率の高い科目、学部、学科は遠隔リアルタイムが首位であった。学科毎に異なる学習要素と授業方法の選択が有ると思われるが、情報環境整備や教員のスキルも影響してくると考える。

表5 学科別授業形態

	授業形態(%)					回答数 (名)
	対面のみ	対面と遠隔	遠隔リアルタイム有り	遠隔オンデマンドのみ	その他	
日本文学文化学科	12.6%	21.0%	5.8%	60.5%	0.2%	2081
心理学科	10.0%	20.4%	11.5%	57.7%	0.3%	1171
こども発達学科	4.7%	37.5%	7.6%	50.0%	0.1%	1834
国際学部	8.6%	11.1%	40.8%	39.0%	0.5%	2643
服飾造形学科	44.8%	28.0%	3.0%	23.8%	0.4%	1471
健康栄養学科	24.4%	28.2%	0.3%	47.0%	0.1%	4886
家政福祉学科	11.7%	15.4%	4.3%	68.4%	0.1%	2233
看護学科	0.3%	18.4%	41.0%	40.2%	0.1%	2117
共通科目	4.2%	13.8%	4.6%	76.8%	0.5%	4609
共通科目(外国語)	2.9%	1.7%	83.5%	11.1%	0.7%	1229
共通科目(資格)	5.5%	21.4%	9.1%	63.7%	0.2%	998
全体	12.2%	19.7%	14.9%	52.9%	0.3%	25637

③授業形態による評価の違いの傾向と遠隔授業の課題

授業形態別に分けて質問項目全24項目の評価値をみると殆ど変化はなく同じような傾向を示していた。前項でも示したとおり、質問項目の中でも注視した「Q13. 積極的に意見や質問をした」と「Q15. 自己学習の時間を確保した」は形態別で見ても差はなかった。[表6]に挙げた質問項目の最高値と最低値の差は、それぞれ「Q3. 内容は知的刺激に富んでいた」(0.33)、「Q13. 積極的に意見や質問をした」(0.44)、「Q14. よく出席・参加した」(0.23)、「Q15. 自己学習の時間を確保した」(0.34)、「Q17. さらに勉強したくなった」(0.37)、「Q18. 学びの目標達成に近づいた」(0.41)、「Q24. 授業の総合満足度」(0.37)であり、あまり差が無いと言える。これらの授業形態にはそれぞれ長短相補う必要があるが学生の授業評価という点からは差がなく、教員は限られたICT環境とスキルを活用して授業に取り組んでいたと考える。

従来授業は「対面」を前提に評価もおこなってきた。学生と教員は、多様な授業形態を経験して、今後、授業のハイブリッド化は進むと考える。Active Learning、e-Learning、Service Learning、PBL、反転授業、インターンシップなどの方法が混在し多くの教育コンテンツが蓄積されていこう。オンラインラーニングは標準となりそれを支えるマルチメディア教材作成のための支援室やインフラの整備が必要となる。

表 6 授業形態による評価

質問項目	授業形態(%)					全体平均
	対面のみ	対面と遠隔	遠隔リアルタイム有り	遠隔オンデマンドのみ	その他	
Q3. 内容は知的刺激に富んでいた	4.5	4.42	4.37	4.37	4.17	4.4
Q13. 積極的に意見や質問をした	3.93	3.83	3.82	3.53	3.49	3.69
Q14. よく出席・参加した	4.69	4.63	4.63	4.56	4.46	4.6
Q15. 自己学習の時間を確保した	4.17	4.11	4.12	4.02	3.83	4.07
Q17. さらに勉強したくなった	4.3	4.26	4.17	4.19	3.93	4.21
Q18. 学びの目標達成に近づいた	4.34	4.31	4.19	4.18	3.93	4.23
Q24. 授業の総合満足度	4.47	4.4	4.4	4.34	4.1	4.37

(2) 授業の総合満足度からみた今後の課題

2021 年度授業評価アンケートの各項目の平均を [表 7-1]、[表 7-2] に示した。以下では、共通総合科目・専門科目別に、各学科長（一部学部長・センター長）の考察をあげる。

表 7-1 2021 年度 授業評価アンケート各項目平均（共通総合科目）

No.	設問	全体	全セ (共通)	全セ (共通外国語)	全セ (共通資格)
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	4.37	4.41	4.36	4.37
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.40	4.41	4.28	4.42
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.48	4.52	4.28	4.51
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.18	4.15	4.34	4.17
Q6	教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	4.36	4.43	4.35	4.34
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.25	4.33	4.21	4.24
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.24	4.18	4.37	4.20
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.20	4.14	4.33	4.17
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.39	4.37	4.39	4.39
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.25	4.32	4.33	4.28
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.35	4.37	4.40	4.39
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.69	3.55	3.78	3.72
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.60	4.60	4.61	4.59
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.07	3.97	4.12	4.09
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.40	4.41	4.37	4.44
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.21	4.22	3.99	4.30
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.23	4.12	4.00	4.35
Q19	この授業により、「自分を知り誇りを持つ力」が向上した	3.95	3.96	3.83	4.10
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.10	4.09	4.15	4.20
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.02	4.03	3.98	4.15
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.16	4.14	4.03	4.26
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.23	4.20	4.00	4.36
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.37	4.44	4.39	4.41
	回収率	49%	48%	66%	39%

表 7-2 2021 年度 授業評価アンケート各項目平均（専門科目）

No.	設問	全体	日文	心理	こども	国際	服飾	健康	家福	看護
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	4.37	4.36	4.43	4.31	4.40	4.40	4.40	4.38	4.20
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.40	4.45	4.47	4.38	4.42	4.52	4.38	4.43	4.25
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.48	4.50	4.54	4.48	4.47	4.61	4.47	4.52	4.36
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.18	4.21	4.24	4.18	4.27	4.32	4.12	4.19	4.00
Q6	教材（配布資料、動画、音声、PwPなど）が理解に役立った	4.36	4.40	4.45	4.30	4.41	4.38	4.34	4.37	4.21
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.25	4.29	4.30	4.17	4.30	4.30	4.18	4.29	4.08
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.24	4.25	4.34	4.22	4.38	4.44	4.22	4.20	4.09
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.20	4.20	4.26	4.18	4.35	4.39	4.15	4.19	4.07
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.39	4.42	4.39	4.32	4.43	4.47	4.44	4.45	4.17
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.25	4.28	4.25	4.16	4.29	4.24	4.24	4.29	4.08
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.35	4.42	4.35	4.38	4.41	4.46	4.27	4.37	4.19
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.69	3.66	3.69	3.67	3.82	4.00	3.62	3.75	3.67
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.60	4.56	4.61	4.68	4.62	4.63	4.58	4.63	4.56
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.07	4.02	4.05	4.11	4.05	4.20	4.10	4.15	4.08
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.40	4.37	4.42	4.45	4.46	4.45	4.34	4.47	4.36
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.21	4.26	4.26	4.25	4.23	4.33	4.17	4.29	4.13
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.23	4.18	4.29	4.33	4.20	4.32	4.28	4.34	4.20
Q19	この授業により、「自分を知り誇りを持つ力」が向上した	3.95	3.93	4.04	3.96	3.97	3.99	3.85	4.03	3.97
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.10	4.16	4.09	4.08	4.18	3.96	4.05	4.15	4.05
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.02	4.02	4.18	4.13	4.07	3.94	3.86	4.11	4.06
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.16	4.10	4.22	4.16	4.18	4.24	4.13	4.25	4.12
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.23	4.02	4.28	4.31	4.19	4.30	4.28	4.38	4.23
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.37	4.41	4.44	4.36	4.41	4.43	4.32	4.40	4.17
	回収率	49%	40%	39%	66%	46%	47%	66%	49%	39%

1) 共通総合科目（全学教育センター）の課題（全学教育センター長 田口久美子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

全学教育センター（以下全セ）では、共通総合科目（以下共通）、共通外国語（以下外国語）、免許・資格（以下資格）の3つの領域で点数が算出された。「Q24. 授業に対する総合満足度」では、3つのすべての領域が共通 4.44、外国語 4.39、資格 4.41と、全体平均点 4.37 を上回った。全セで展開する科目はおおむね満足度が高かったといえる。その要因について、3領域での24項目の点数から考察していきたい。共通・外国語では、24項目のうち平均点を下回っていたのは10項目、資格では6項目であった。一方で、項目ごとの得点に着目すると、全セが所轄する3領域において、24項目のうち8つの項目について、最高得点を呈している。

内訳は、共通が「Q7. 教員の説明がわかりやすかった」、外国語では「Q5. 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」、「Q11. この授業の運営時間、学習量が適切だった」、資格では、「Q18. この授業により自分の大学での学びの目標達成に近づいた」、「Q19. 『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」、「Q20. 『基礎学力と文章力』が向上した」、「Q22. 『課題を解決する力』が向上した」であった。共通総合科目では説明がわかりやすいこと、外国語科目では Zoom という相方向的なコミュニケーションツールが効率よく活用されていること、免許・資格課程においては、キャリア形成にかかわる学習を通して学びの目標に近づいていることのほか、和洋女子大学が掲げる5つの力のうち3つにおいて高評価を得ていることがわかった。これらより、

全セがカバーする個々の3領域での教育内容・教育方法に親和性のある項目での高得点が、総合満足度での高い評価に結実したと分析する。

②今後の課題

一方で、これらの3領域において、平均点を下回る項目も多数見られている。共通・外国語では10項目、資格では6項目が平均点を下回った。各領域で平均点との差が大きな2項目を挙げてみる（かっこの中の数字は平均との差）と次のようであった。共通では、「Q15. この時間では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」(0.1)、「Q18. この授業により、自分の大学での学びの目標達成に近づいた」

(0.1)、外国語では、「Q18. この授業により、自分の大学での学びの目標達成に近づいた」(0.23)、「Q17. この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」(0.22)、資格では、「Q8. 教員へ質問できる時間や環境があった」(0.04)、「Q9. 教員の質問への対応が適切であった」(0.03)であった。共通では、学習時間の確保や大学での学びの目標という点が、外国語では学びの目標や新たな学習への意欲が、資格では教員への質問の環境が課題として浮かび上がった。共通総合科目が専門に直結しないという認識、外国語が特定の学科を除き自分の目標や新たな学びにつながるという認識、免許・資格課程が「教員に質問しづらい」という認識が学生たちにあることが確認された。こうした課題が見受けられたことを全セ教員で共有し、学生たちの学びに資する教育内容や教育方法を構築していきたい。

2) 日本文学文化学科の専門科目の課題（学科長 吉井美弥子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2021年度もCOVID-19の収束は見えず、授業の実施形式はコロナ禍以前とは異なるものとなった。したがって、今回の数値の結果を、2020年度はもとより、それ以前の数値と比較してもあまり意味がないと思われる。そこで、きわめて単純ではあるが、ここでは2021年度における日本文学文化学科と全体平均の数値の差を確認することで述べていくこととしたい。

本学科の「授業の総合満足度」は、4.41であり、全学平均の4.37を上回った。具体的な項目別で見ると、全体平均を0.05以上上回った設問は、「Q3. この授業の内容は知的刺激に富んでいた」（本学科4.45、全体平均4.40）、「Q12. この授業から教員の熱意を感じた」（本学科4.42、全体平均4.35）、「Q17. この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」（本学科4.26、全体平均4.21）、「Q20. この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した」（本学科4.16、全体平均4.10）、の4項目であった。

一方、全体平均を 0.05 以上下回った設問は、「Q15. この授業では予習・復習などを
含め自己学習の時間を確保した」（本学科 4.02、全体平均 4.07）、「Q18. この授業によ
り、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」（本学科 4.18、全体平均 4.23）、
「Q22. この授業により、「課題を解決する力」が向上した」（本学科 4.10、全体平均
4.16）、「Q23. この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」（本学科 4.02、全
体平均 4.23）の 4 項目であった。

以上の結果を見ると、良くも悪くも、日本文学を軸としつつ書道や芸術系の専門科
目を有する本学科の特色が表れていることが知られる。その中で、「Q12. この授業か
ら教員の熱意を感じた」（本学科 4.42、全体平均 4.35）の高い数値は、本学科の教員
の熱意と努力が学生に確実に伝わっていることが知られる喜ばしい結果といえる。一
方で、「Q23. この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」（本学科 4.02、全
体平均 4.23）の数値の低さが目立つ。本学科での学修がいわゆる実学を中心としてい
ないだけに、学科での学びを通して読解力、思考力、文章力、表現力等が確実に向上
したとしても、それが「社会に役立つ専門力」かと問われると、学生の中には回答を
ためらう者もいるにちがいない。その結果がこの数値に反映しているのではないかと。
また、本学科での学びが、その後の「豊かな人生に役立つ力」となることは確実であ
るので、この設問自体が本学科の学修の目標とはなじまないのではないかと考える次
第である。

②今後の課題

学科としての特色を大いに活かしながら、今後もいつそう学生の学修意欲を高め、実
力を向上させていくことが継続的課題である。それにしても、本学科のアンケート回収
率の低さ（本学科 40%、全体平均 49%）は改善したい。2022 年度は、対面授業も大い
に復活するとともに授業評価アンケートの実施方法にも変更が加えられたので、回収
率が高くなることを期待している。なお、2022 年度は本学科の新カリキュラム完成年
度である。その意味からも学生による授業評価アンケートの結果を注視したい。

3) 心理学科の専門科目の課題（学科長 池田幸恭）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

心理学科の授業の総合満足度（Q24）は「4.44」であり、全体平均の 4.37 を上回り、
大学全体においても高い評価を得ることができた。授業評価アンケートの各項目にお
いて、特に全体平均より高い評価を得ていたのは、「Q19. この授業により、「自分を
知り誇りを持つ力」が向上した」（全体平均 3.95、心理学科 4.04）、「Q21. この授業
により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した」（全体平均 4.02、心理学科 4.18）
であった。これらの力は、心理学科のディプロマ・ポリシーである「事実を知るためのデー

を適切に収集し分析する力、人と人の関係を円滑にするコミュニケーション力、人の心の基礎を理解し人を支える力を身につけている」、「論理的な説明力、文章力、発表力をもとに議論する技術を学び、社会人の基礎となる力を身につけている」などに対応しており、学生の自己理解や人間理解ならびに自分を表現する力を着実に育てることに貢献していると考えられた。また、「Q8. 教員へ質問できる時間や環境があった」という項目についても、全体平均 4.24 に対して心理学科では 4.34 であり、一人ひとりの学生へ丁寧に対応していることが授業の総合満足度へつながっている可能性が指摘できる。

これに対して、「Q15. この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」（全体平均 4.07、心理学科 4.05）、「Q20. この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した」（全体平均 4.10、心理学科 4.09）という項目については、全体平均よりもわずかに評価が下回っていた。学生の自己学習の推進、さらに基礎学力と文章力を着実に身に着けることができるような工夫が必要であると考えられる。

また COVID-19 の感染拡大に伴う対応のため、2020 年度の授業評価アンケートは後期のみ 2021 年度と同一の内容で実施された。心理学科の授業形態は、2020 年度では「対面と遠隔」が 71.0%（学科の回答数 991 件）、2021 年度では「遠隔オンデマンドのみ」が 57.7%（学科の回答総数 1171 件）であった。そのため参考に留まるが、心理学科の授業の総合満足度（Q24）は 2020 年度後期 4.24 から 2021 年度 4.44 に推移し、全体平均の 2020 年度後期 4.22 から 2021 年度 4.37 の推移と比較して大きく向上した。遠隔授業の展開を学科で共有し、学生の要望や懸念事項について検討を重ねた成果がみられたといえる。

②今後の課題

COVID-19 の流行状況に伴う遠隔授業から対面授業を中心とした授業展開への過渡期においては、特に学生が直面している困難に留意して授業を展開したい。

心理学科では、現カリキュラムの成果と課題を踏まえてカリキュラム改定を検討する上で、学生が基礎学力と文章力を着実に身に着けることができるように教育体制を整える。さらに、公認心理師カリキュラムを履修する学生と履修しない学生の双方が、地域社会と結びついた学びの場や活躍の機会を設ける。これらをとおして、学生の授業外の学びについても推進していく。

また 2021 年度授業評価アンケートの心理学科の回収率は 39%であり、全体平均の 49%に比べて 10%ほど少なかった。学生の声を広く聴くことができるように、授業評価アンケートの回収率の向上を目指すことも今後の課題である。

4) こども発達学科の専門科目の課題 (学科長 矢藤誠慈郎)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2021年度は遠隔オンデマンドのみの授業が前年の30%から50%に増加した(対面の機会が一層減少した)にもかかわらず、総合満足度はほぼ全学平均(-0.1)であり、前年(-0.4%)より僅かではあるが改善が見られた。一方で、対面授業を多く行っている学科に及ばない状況であり、授業形態の影響が少なくない可能性がうかがわれる。ほとんどの項目で2020年度の値を上回っており、オンラインの授業に切り替わった2020年度における学生の戸惑いや教員の試行錯誤の時期をある程度脱して、授業の運用方法が改善され、また学生がオンラインの授業形態に適応して学習のペースを比較的安定させることができるようになったことが関係していると考えられる。

また、「Q4. この授業で新しい知識・技術を学べた」、「Q5. 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」が全学平均と同じであり、「Q12. この授業から教員の熱意を感じた」は全学平均を上回り、学びを一定程度保障しつつ、そのための教員の努力が学生に伝わっていると考えられる。

全学平均を上回る項目としては、「Q14. この授業はよく出席・参加した」、「Q15. この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」、「Q16. この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ」など学生自身の取り組みによるものが挙げられる。他には「Q17. この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」、「Q18. この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、「Q19. この授業により、『自分を知り誇りを持つ力』が向上した」、「Q21. この授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」、「Q23. この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」が全学平均を上回り、「Q22. この授業により、『課題を解決する力』が向上した」が全学平均と、学修成果について一定の評価がうかがわれる。

回収率が相対的に多いことが影響している可能性も考えられるが、全学平均との差が著しいものは特になく、授業方法への評価の多くが全学平均を下回る一方で、教員の取り組みへの評価と学生自身の学修態度や学修成果が相対的には保たれているといえる。学科の専門教育として、COVID-19への対応による影響は適切な範囲に抑制できていると思われる。

②今後の課題

対面授業が中心となった2022年度前期に、授業方法への反応がどのように変化するか注視する必要があるだろう。改善しなければ、そもそも授業方法に課題があるということであり、改善した場合は、再びオンライン授業が中心となるような事態が生じた場合に、一層の工夫を組織的に検討し、実施していくことが求められよう。

授業アンケートの回収率が相対的には高いとはいえ、2/3に留まっており、授業改善への貴重な資料であることを学生に伝えてより協力を依頼する必要がある結果である。オンラインの授業が多いことによる案内や回答形式の問題も考えられるので、授業時に呼び掛けて回答の時間を確保している2022年度前期の回収率を注視したい。

5) 国際学部の専門科目の課題 (学部長 里正明伍)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2021年度は授業形態の面でゼミ、実践系科目はできるだけ対面に戻し、語学はオンラインを中心に展開した。そのこともあって授業に対する総合的な満足度は前年度に比べ若干上昇し(4.36→4.41)、全学平均(4.37)より若干高かった。この総合的な満足度の要因の全体像を把握するためにその構成要素について分析する。教員の授業運営に関しては、「Q6.教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った」といった教材使用の面で相対的に評価が高かった(4.41)。前年度(4.37)より高く、全学平均(4.36)よりも高くなっているが、これは主にオンライン用の教材の工夫によるものと思われる。それに対し「Q5.学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」、「Q7.教員の説明がわかりやすかった」、「Q8.教員へ質問できる時間や環境があった」、「Q9.教員の質問への対応が適切だった」、「Q11.授業の運営時間、学習量が適切だった」といった授業の進め方や勉強の量などの面では全学平均および前年度よりは概ね高くなっている(Q7のみ全前年度と同点の4.30)が、前述のQ6とは一定の距離があり、対面、オンライン、オンデマンドなどが混在する状況での授業の進め方の最適化の難しさが窺える。

一方授業効果に関しては、「Q3.授業の内容は知的刺激に富んでいた」、「Q4.授業で新しい知識・技術を学べた」といった刺戟的な知識の獲得の面では前年度(それぞれ4.38、4.41)よりは少し高くなっている(それぞれ4.42、4.47)が、全学平均(それぞれ4.40、4.48)とはほぼ同じだった。そして「Q19.授業により、『自分を誇りを持つ力』が向上した」、「Q20.授業により、『基礎学力と文章力』が向上した」、「Q21.授業により、『人を理解し自分を表現する力』が向上した」、「Q22.この授業により、『課題を解決する力』が向上した」といった教養の力や基礎学力の獲得の面では全学平均(それぞれ3.95、4.10、4.02、4.16)および前年度(それぞれ3.92、4.16、3.99、4.17)より少し高かった(それぞれ3.97、4.18、4.07、4.18)。これは国際的教養重視の教育方針と関連するように思われる。これに対し「Q18.授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、「Q23.授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」といった具体的で分かりやすい目標の達成や実用的な専門知識の獲得の面では全学平均(それぞれ4.23、4.23)を若干下回った(それぞれ4.20、4.19)。これは教養・基礎力重視の教育目標とも関連するように思われる。対前年度では、「Q18.授業により、自身の大学での

学びの目標達成に近づいた」が高くなり（4.12→4.20）、「Q23. 授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」はほぼ同程度（4.20→4.19）だった。

②今後の課題

上の①の分析で課題がある程度浮き彫りになったがそれを次の2点にまとめることとする。まず、授業に対する総合的な満足度では全学平均を上回っているが、相対的に授業の進め方の面で対面、オンライン、オンデマンドのそれぞれに対応した方法の研鑽を更に重ねていく必要があるように思われる。そして目標の具体化や実用性とのリンクなどのあり方について、教養・基礎力重視との両立を視野に入れつつ探究を続ける必要があるように認識する。

6) 服飾造形学科の専門科目の課題（学科長 伊藤瑞香）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2021年度の総合満足度の平均値は（4.43）であり、2020年度後期は（4.29）であったため、（0.14）の上昇である。まず授業の進め方については「Q2. この授業はシラバスに沿っていた」、「Q3. この授業の内容は知的刺激に富んでいた」、「Q4. この授業で新しい知識・技術を学べた」が（0.12-0.15）上昇している。次に教授方法としては「Q5. 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」、「Q8. 教員へ質問できる時間や環境があった」、「Q9. 教員の質問への対応が適切だった」が（0.2-0.25）上昇している。そして主体的な学びということ言えば「Q13. 自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」、「Q15. この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」が（0.19-0.26）上昇していることが分かった。

授業形態は、対面・対面と遠隔を合わせると2020年度は46.1%、2021年度は72.8%と従来の対面での授業に戻りつつある状態であった。以上のことを鑑みると、2021年度はやはり対面での授業が多くなったことで、授業で新しい知識・技術を学べたことを実感するなど、教員とのコミュニケーションをとることで、自分の学びに対しての不安感を払拭し、意見や質問も積極的にできるようになり、自己学習の時間確保もできたものと思われる。

②今後の課題

服飾造形学科の特色として、実験・実習が多いことから授業の80%以上は対面に戻すことが理想と考える。ただ、2021年度の評価平均はすべての項目で2020年度より上回っていることから、遠隔授業であっても知的刺激に富んだ授業や、学びの目標達成に近づくことができるということが理解できれば、遠隔でもモチベーションを降下させずに進めることができるのではないかと考える。コロナ禍がまだ落ち着かないなか、

対面と遠隔のすみ分けを行い、これまで通り manaba course で学生との連絡を密にし、オンライン教材作りの工夫をさらに続け、学生の学び促進へ繋げたいと考える。

7) 健康栄養学科の専門科目の課題 (学科長 本三保子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

健康栄養学科専門科目の総合的満足度の平均値は 4.32 であり、全体の平均値である 4.37 に比べて低値であった。全体の平均値と比較して顕著に低値であった項目は、「Q19. この授業により「自分を誇りを持つ力」が向上した」、「Q21. この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した」であった。加えて「Q7. 教員の説明がわかりやすかった」や「Q12. この授業から教員の熱意を感じた」も全体の平均値と比較して低値であり、これら項目の評価が総合満足度の低下につながったと考えられる。一方、全体の平均値と比較して高値であった項目は、「Q18. この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、「Q23. この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」であったが、全体の平均値との差が僅かであり、総合満足度の上昇に結び付かなかったと考えられる。

②今後の課題

健康栄養学科の教育目標は健康と栄養の専門家である栄養士・管理栄養士の育成であり、学生の学ぶ目標も明確である。しかし、「Q18. この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、「Q23. この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」の評価と全体平均の差は僅かであった。学年別の評価がないため不明であるが、1 年生において高校から大学の教育に移行したその変化に対応できていなかった可能性が考えられる。目的意識や学習意欲を高め、目標達成のために努力する姿勢を身につけるような指導を、低学年から徹底していかなければならない。大学で学ぶ意義、目指す目標の確認等、導入の教育に更に重点を置くことで、「Q18. この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、「Q23. この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」の評価向上を目指したい。また、教員は栄養士・管理栄養士を育成するという熱意を持って教育に取り組んでいるが、それが学生に伝わっていないことが明確になった。今回の結果を学科会議において共有し、「Q12. この授業から教員の熱意を感じた」、「Q7. 教員の説明がわかりやすかった」、「Q5. 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」の評価向上を目指して課題に取り組みたい。

8) 家政福祉学科の専門科目の課題 (学科長 大石恭子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

当学科の「授業に対する総合的な満足度」は大学平均よりも若干高い程度であったが、

各項目を詳細に見ると、大学平均を下回ったのは2項目のみであった。全般的に全学科(7学科1学部)の中では高い方であり、特筆すべきは、「Q11. この授業の運営時間、学習量が適切であった」、「Q16. 授業のポートや試験に積極的に取り組んだ」、「Q18. この授業により自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、「Q22. この授業により‘課題を解決する力’が向上した」、「Q23. この授業により‘社会に役立つ専門力’が向上した」の5項目が、全学科の中で最も高い評価を得たことである。また「Q10. 出席確認の方法が適切であった」、「Q15. この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」、「Q17. この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」、「Q19. この授業により‘自分を知り誇りを持つ力’が向上した」の4項目は、全学科の中で2番目に高い評価を得ていた。回答者の68.4%が遠隔オンデマンドのみでの授業参加であったにも関わらず、高評価を得ることができたのは、学科の先生方がオンデマンド形式の授業に対して、各々工夫された結果と言える。また資格取得のための授業が多いため、学生の学ぶ目標が明確であり、「Q18. 目標達成」や「Q23. 社会に役立つ専門力の向上」を実感しやすいと推察される。

②今後の課題

学科平均が大学全体よりも低かったのは「Q8. 教員へ質問できる時間や環境があったか」、「Q9. 教員の質問への対応が適切だったか」の2項目であった。遠隔オンデマンドのみの授業形態がほとんどを占める中で、質問に丁寧に対応する手段を講じることができなかったのは、今後の課題である。平均よりもわずかに高い項目が4つあり、「Q5. 教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」、「Q6. 教材が理解に役立った」、「Q12. この授業から教員の熱意を感じた」の3項目はもう少し高い評価を目標としたいところである。

Q10～Q24において、総じて評価が高かったにも関わらず、総合評価がそれほど高値でない理由は、遠隔オンデマンドの授業形態が原因であろうか。今回の結果は学科会議で共有し、今後の励みにしつつ、課題については検討したい。

9) 看護学科の専門科目の課題 (学科長 白鳥孝子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

看護学科の総合満足度は、2020年度に比較するとほとんどの項目でポイントが上がっていたが、他学科に比較すると多くの科目で低値であった。この原因として、極端に評価が低い科目が複数科目あったことや、医学系の科目などの難解かつ非常勤教員によるオムニバス科目が多いことが挙げられる。これらの科目の中には、自由記載には教員の丁寧な対応に感謝の言葉を書きながらも評価が低い科目もあり、難解な科目への総合満足度が低くなることが考えられた。また、技術教育を主要とする科目では、オン

デマンド教育にせざるをえなかったことが影響し、学生の達成感が得られなかったことが大きな要因と考える。Zoom では一方的な講義となりやすいため、学生の理解度の確認等さらなる工夫が必要であった。

項目別にみると、Q2～Q13 が低値であった。Q5～Q11 では、オンデマンド動画の確実な視聴を促進するために出席確認方法を工夫したことが面倒と受けとめられたり、動画の精度・編集方法・公開期間への不満などが影響していると考えられる。「Q12. 教員の熱意を感じた」は、オンデマンドであっても授業や看護に対する教員の熱意を感じられるような工夫が必要であった。一方、同じ科目においても、クラスによって評価の差が大きく、学生からの発信や教員とのやり取りが多かったクラスは評価が高い傾向にあった。

②今後の課題

主に非常勤講師で教授する医学系科目などの難解な科目については、学生のレディネスに合わせた講義を実施していただけるように依頼する。また、技術系科目でオンデマンドにせざるを得ない場合、よりわかりやすい動画や資料の作成に加え、技術の習得が実感できる教育内容の工夫や学生と双方向のやり取りができるようなしくみをつくる必要がある。対面授業により、学生の満足度も上がることが期待されるが、できるだけ学生が発言をする機会を設けたり、教員からの発信方法を工夫し、学生と教員との親密な関係づくりや、複数教員が担当する科目においては、教員同士の連携により、統一した指導ができるように努力したい。最後に、2021 年度はアンケート回収率が 39% であった。科目によっては 30% を下回るものもあり、このアンケート結果だけでは評価が難しい。今後、回収率を上げられるようにする必要がある。

以上、共通総合科目・専門科目別に、①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因、②今後の課題をみてきた。全ての科目で同一の質問項目を使用しているため、「Q20. 基礎学力と文章力」や「Q23. 社会に役立つ専門力」等、履修学年や科目によっては重きをおかなくてもよい項目があるが、学科ごとに課題を明示することができた。2020 年度は、年度初めから登校が制限され、開講後も緊急事態宣言等によって授業形態を小刻みに変更せざるをえなかった。この経験をもとに、2021 年度は予め遠隔授業を設計し、実習等の授業での対面の機会を確保しつつ、会話授業を遠隔リアルタイム、講義系を遠隔オンデマンドに年度当初から振り分けていた。感染状況によって当初対面の科目を遠隔に切り替える場合もあり、教職員・学生ともに遠隔授業への適応が問われた年度といえる。複数学科で指摘された回収率の低さは、遠隔授業内での実施が影響した可能性がある。今後、回収率については対面授業内での実施によって改善が見込めるが、調査方法の改善も検討したい。

(参考) 2020年度授業評価アンケート各項目平均 (※2020年度は後期のみ実施)

No.	設問	全体	全セ (共通)	全セ (共通)	全セ (共通)	全セ (共通)	日文	心理	こども	国際	服飾	健康	家福	看護
Q2	この授業はシラバス(変更したシラバスも含む)に沿っていた	4.25	4.26	4.24	4.31	4.25	4.29	4.21	4.32	4.28	4.28	4.25	4.11	
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.30	4.30	4.21	4.37	4.33	4.38	4.30	4.38	4.37	4.31	4.30	4.16	
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.39	4.39	4.18	4.47	4.39	4.45	4.36	4.41	4.46	4.42	4.41	4.30	
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.05	3.91	4.32	4.08	4.09	4.09	4.06	4.17	4.12	3.98	4.12	3.82	
Q6	教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った	4.28	4.26	4.19	4.38	4.26	4.38	4.25	4.37	4.33	4.27	4.32	4.08	
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.14	4.15	4.18	4.20	4.19	4.20	4.04	4.30	4.25	4.05	4.19	3.95	
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.14	3.95	4.29	4.13	4.23	4.18	4.13	4.27	4.19	4.15	4.15	3.95	
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.12	3.68	4.14	4.13	4.18	4.16	4.10	4.25	4.18	4.12	4.15	3.92	
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.28	4.19	4.27	4.31	4.25	4.33	4.24	4.34	4.38	4.35	4.35	4.03	
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.14	4.15	4.24	4.17	4.18	4.19	3.99	4.22	4.22	4.13	4.13	3.96	
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.26	4.23	4.35	4.35	4.33	4.25	4.25	4.37	4.36	4.19	4.28	4.11	
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.56	3.14	3.62	3.65	3.45	3.66	3.56	3.70	3.74	3.54	3.63	3.45	
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.59	4.54	4.56	4.57	4.54	4.62	4.67	4.66	4.57	4.59	4.58	4.62	
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	3.96	3.73	4.06	4.04	3.93	4.00	4.08	3.97	4.01	4.02	3.96	3.92	
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.35	4.27	4.36	4.42	4.33	4.37	4.46	4.43	4.38	4.32	4.33	4.28	
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.12	4.06	3.88	4.31	4.15	4.16	4.19	4.19	4.20	4.09	4.18	4.05	
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.13	3.91	3.84	4.34	4.11	4.16	4.23	4.12	4.23	4.23	4.19	4.09	
Q19	この授業により、「自分を知り誇りを持つ力」が向上した	3.86	3.76	3.69	4.04	3.84	3.99	3.88	3.92	3.89	3.81	3.91	3.83	
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.01	3.87	4.08	4.17	4.03	4.01	4.01	4.16	3.93	4.00	4.04	3.92	
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	3.93	3.80	3.80	4.13	3.90	4.16	4.08	3.99	3.87	3.79	4.03	3.92	
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.09	3.97	4.02	4.24	4.00	4.12	4.14	4.17	4.17	4.10	4.15	3.99	
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.15	4.02	3.91	4.33	3.92	4.20	4.19	4.20	4.21	4.22	4.29	4.10	
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.22	4.22	4.26	4.29	4.28	4.24	4.18	4.36	4.29	4.19	4.26	3.97	

(参考) 2020年度・2021年度学科別授業形態 (※2020年度は後期のみ実施)

	2020年度 授業形態 (%) ※後期のみ					2021年度 授業形態 (%)				
	対面のみ	対面と遠隔	遠隔リアルタイム有り	遠隔オンデマンドのみ	その他	対面のみ	対面と遠隔	遠隔リアルタイム有り	遠隔オンデマンドのみ	その他
共通科目	0.1%	87.4%	5.3%	3.1%	4.2%	4.2%	13.8%	4.6%	76.8%	0.5%
共通科目(外国語)	0.1%	6.9%	91.6%	0.3%	1.0%	2.9%	1.7%	83.5%	11.1%	0.7%
共通科目(資格)	0.9%	77.9%	4.5%	10.6%	6.1%	5.5%	21.4%	9.1%	63.7%	0.2%
日本文学文化学科	0.3%	60.4%	10.3%	22.7%	6.2%	12.6%	21.0%	5.8%	60.5%	0.2%
心理学科	0.6%	71.0%	24.2%	4.0%	0.1%	10.0%	20.4%	11.5%	57.7%	0.3%
こども発達学科	0.1%	56.1%	13.6%	30.1%	0.1%	4.7%	37.5%	7.6%	50.0%	0.1%
国際学部	0.8%	57.3%	31.1%	8.1%	2.7%	8.6%	11.1%	40.8%	39.0%	0.5%
服飾造形学科	0.5%	45.8%	1.6%	20.7%	31.5%	44.8%	28.0%	3.0%	23.8%	0.4%
健康栄養学科	0.0%	50.4%	0.4%	28.7%	20.6%	24.4%	28.2%	0.3%	47.0%	0.1%
家政福祉学科	1.1%	71.9%	12.1%	6.7%	8.3%	11.7%	15.4%	4.3%	68.4%	0.1%
看護学科	0.7%	36.5%	50.9%	11.3%	0.5%	0.3%	18.4%	41.0%	40.2%	0.1%
全体	0.4%	58.8%	18.7%	14.0%	8.1%	12.2%	19.7%	14.9%	52.9%	0.3%

6. 資料

参考：2021年度授業評価アンケート設問

		強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない	答えたくない・ 該当しない
※Q2～Q24の⑤～①は評価点数となります。①は点数に含まれません。							
Q1	この科目の授業開講方法を選択してください ①対面授業のみ ②対面と遠隔授業の併用 ③遠隔授業のみリアルタイムあり ④遠隔のみオンデマンドのみ ⑤その他	-					
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	⑤	④	③	②	①	①
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	⑤	④	③	②	①	①
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	⑤	④	③	②	①	①
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	⑤	④	③	②	①	①
Q6	教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	⑤	④	③	②	①	①
Q7	教員の説明がわかりやすかった	⑤	④	③	②	①	①
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	⑤	④	③	②	①	①
Q9	教員の質問への対応が適切だった	⑤	④	③	②	①	①
Q10	出席確認の方法が適切であった	⑤	④	③	②	①	①
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	⑤	④	③	②	①	①
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	⑤	④	③	②	①	①
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	⑤	④	③	②	①	①
Q14	この授業はよく出席・参加した	⑤	④	③	②	①	①
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	⑤	④	③	②	①	①
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	⑤	④	③	②	①	①
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	⑤	④	③	②	①	①
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	⑤	④	③	②	①	①
Q19	この授業により、「自分を誇りを持つ力」が向上した	⑤	④	③	②	①	①
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	⑤	④	③	②	①	①
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	①
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	①
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	⑤	④	③	②	①	①
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください ⑤大変満足 ④やや満足 ③どちらでもない ②やや不満 ①不満 ①該当しない・答えたくない	⑤	④	③	②	①	①
Q25	この授業についての意見・感想・希望等あなたが思っていることをできるだけ具体的に何でも入力してください	自由記述					

※マナバコースでの選択肢は仕様上、1「強くそう思う」～5「全くそう思わない」、6「答えたくない」としています。

令和3(2021)年度 授業評価アンケート報告書

令和4(2022)年9月

編集 和洋女子大学 大学・大学院評議会

担当 大神優子 新谷奈苗

発行 和洋女子大学

〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1

TEL 047-371-1111

2020（令和2）年度

学生生活アンケート報告書

和洋女子大学

はじめに

学生生活アンケートは和洋女子大学に学ぶすべての学生・大学院生を対象とし、2年毎に実施しています。本報告書は2020（R2）年度に実施した調査結果を総括したものです。本調査は本学の教育内容と教育環境を検証し、点検することを目的としており、調査は学生の意見集約に留まらず、調査結果から本学の教育課題を抽出し、その課題解決の道筋を大学の「事業計画」と学部・学科の「目標と計画」に反映させています。本学の大学教育の質保証の出発点のひとつとなるのがこの学生生活アンケートです。

今回の調査は COVID-19 のパンデミックにより学生の学修環境が激変した年でした。面接授業が ICT を活用した遠隔授業に切り替わり、学生は大学から配信される資料を読み、講義動画を視聴して学ぶこととなりました。語学教育など対面で表情の確認が必要な科目は遠隔双方向システムの導入で対応しました。学生は従来経験したことのない在宅学修が中心となり、結果として家での学修時間は飛躍的に増えました。また、それまで一部の科目でしか使用していなかった学修支援システム（Learning Management System）は、ほぼ全教科で使用され、学生との双方向のやり取りをする「デジタル教室」として活用されました。

学修環境が一変したことで、学生からは「不満」、「戸惑い」がこの調査にも数多く寄せられました。本学では学内の各所にインターネットの繋がった共用パソコンを設置し、それを使って学びを深める体制でした。しかし、共用パソコンは感染予防上不適切であることがわかり、パンデミックを契機にBYD（Bring Your Own Device）スタイルに変更しました。大学教育で使用するパソコンの標準機器を周知し、また家庭内の ICT 環境を整える支援金を全学生に支給しました。それによって学生の大半が専用 PC を保有しています。このように BYD を進めたことにより、多様な教育機会を確保でき、これからの DX (Digital Transformation) 時代に対応する教育基盤の整備ができました。たとえば、「反転授業」や遠隔授業と面接授業を同時に行う「ハイブリッド型授業」がその例です。激変した環境変化に学生、教職員が柔軟に対応し、それを契機に未来の教育を見据えた取り組みに踏み出せました。こうした取り組みが功を奏して学生の授業満足度はパンデミック前と比べても下がらずにすんでいます。一方で、経済的な理由等で十分に学修環境を整えられない学生への支援は今後も継続し、誰もが同じ環境で学べる機会を保障することが大学の使命と考えています。

最後にパソコンから溢れ出てくる情報と格闘し、学びを継続した学生とその準備に奔走して下さった教職員のみな様に感謝する次第です。加えて、アンケートにも快く回答してくれた学生の思いに応えるためにもこの調査結果を大学の「教育の質保証」に活かすことを約束いたします。

和洋女子大学 学長
岸田宏司

目次

I. 学生生活アンケートの概要	1
1. 調査の目的	1
2. 調査結果の概要.....	1
(1) 回答者数.....	1
(2) 回答者の属性.....	1
II. 学生生活アンケート結果（総論）	5
1. 学生生活アンケートの実施に当たって.....	5
2. 教育内容から見た大学の問題と課題.....	5
(1) 「教育目標の認知」と「カリキュラムの合致度」	5
(2) 勉強の目標とその取り組み状況.....	6
(3) 科目群別授業の満足度.....	6
3. 大学生活についての評価結果からみた大学の問題と課題.....	7
(1) 授業以外の学習時間.....	7
(2) ICT の活用	8
4. 事務部署についての評価結果から見た大学の問題と課題.....	9
(1) 窓口業務の評価.....	9
(2) 事務方への自由記述から記載.....	10
III. 学生生活アンケート結果その1（教学関連）	13
1. 教育目標やカリキュラムについて.....	13
2. 授業の満足度について.....	17
3. 進路について	21
4. 大学全体について.....	22
IV. 学生生活アンケート結果その2（生活関連）	25
1. アルバイトの実態について.....	25
2. 学生の経済状況について.....	26
3. モバイル通信端末・PC の利用実態について	27
4. 大学 WEB サービスの利用実態について.....	31
5. 大学施設の利用実態について.....	33
6. 大学施設の満足度について.....	36
7. 事務対応の満足度について.....	38
V. COVID-19 まん延による影響	41
1. 学生からのコメント集約.....	41
2. 授業について	41
3. 経済支援について.....	42
4. 施設設備について.....	43

5. 学生のコメントに対する大学の対応.....	43
VI. 各学科および各課の問題点と課題.....	47
1. 日本文学文化学科.....	48
2. 心理学科	50
3. こども発達学科	52
4. 英語コミュニケーション学科.....	54
5. 国際学科	56
6. 服飾造形学科	58
7. 健康栄養学科	60
8. 家政福祉学科	62
9. 看護学科	64
10. 全学教育センター.....	66
11. 教務課	68
12. 教育支援課	69
13. 学術情報センター事務室.....	70
14. 学生課	71
15. 進路支援センター事務室.....	72
16. 財務管財課	73
VII. 満足度からみた問題と課題	75
VIII. 資料.....	83

I 学生生活アンケートの概要

1. 調査の目的

大学の教育や学生生活に関連する課題について学生の視点で情報を収集し、発見された問題点の改善や、大学改革の方向性を見定めるための基礎データとして活用していくことを目的に、2004（H16）年度より全学生を対象とした教学・生活関連アンケート調査を実施し、今回の2020（R2）年度で15回目となる。実施運営は、大学評議会の学生生活アンケート担当者（里正明伍国際学部長、湊久美子教学部門長、伊藤博康学生支援部長）と庶務課が行った。

2. 調査結果の概要

(1) 回答者数

アンケートは、教学関連アンケート・生活関連アンケートの2回に分け実施した。回答数（回収率・総数）は以下のとおりである。また、学年毎の提出率は図表Ⅰ-3、表Ⅱ-3のとおりである。

<2020（令和2年）年12月末日現在>

①教学関連アンケート回答数：1,842件（回答数61.3%・総数3,007人）

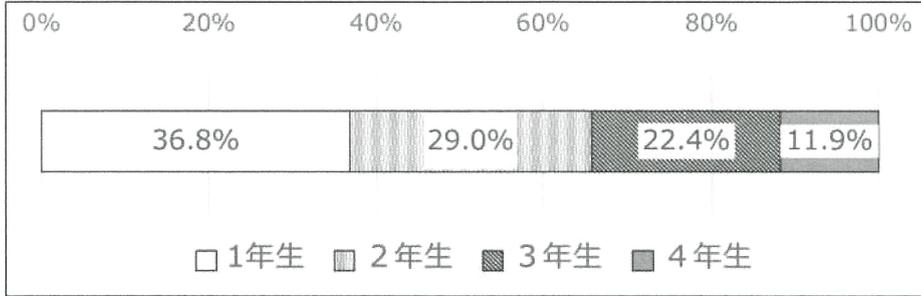
②生活関連アンケート回答数：1,849件（回答数61.5%・総数3,007人）

※①②両方の提出者数1,790件（回答数59.5%：総数3,007人）

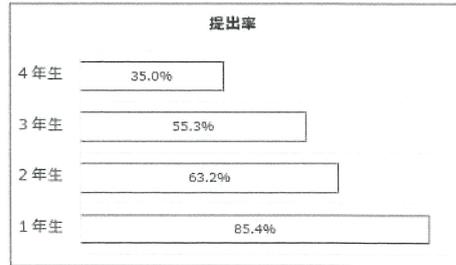
(2) 回答者の属性

教学関連アンケート、生活関連アンケートの各回答者属性は図表Ⅰ-1・2、図表Ⅱ-1・2、学年毎の提出率は図表Ⅰ-3、Ⅱ-3のとおりである。また、表内各項目は小数点第2位以下を四捨五入しているため、それぞれの合計が必ずしも100%にはならない。各回答結果については、旧学類（専修・コース）を現学科に統合する。

図表 I-1 教学関連アンケート回答者



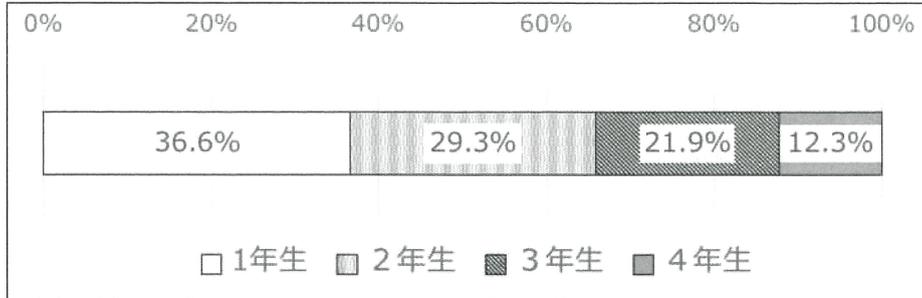
図表 I-3



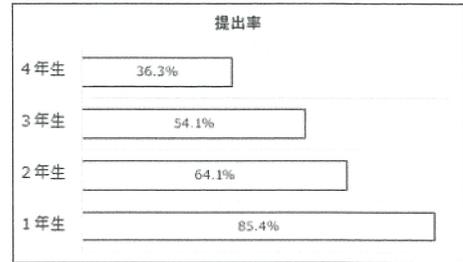
図表 I-2

1年生														1年生計						
人文学部			国際学部		家政学部			看護学部												
日本文学文化学科	心理学	こども発達学科	英語コミュニケーション学科	国際学科	服飾造形学科	健康栄養学科	家政福祉学科	看護学科												
4.8%	3.1%	3.6%	2.6%	3.0%	3.3%	6.5%	5.3%	4.6%							36.8%					
2年生														2年生計						
人文学部			人文学部						家政学部			看護学部								
国際学類	日本文学文化学類	心理学類	国際学類	日本文学文化学類				心理学	こども発達学科	服飾造形学科	健康栄養学科	家政福祉学科	看護学科							
英語文化コミュニケーション専修	日本語表現専修	心理学専修	英語文化コミュニケーション専攻	国際社会専攻	日本語表現専攻	日本文学専攻	文化芸術専攻	/	/	/	/	/	/	/	/					
0.0%	0.0%	0.1%	2.1%	2.2%	0.1%	0.0%	0.1%	4.6%	2.3%	3.3%	2.4%	4.8%	3.1%	3.9%	29.0%					
3年生														3年生計						
人文学部			人文学部						家政学部		看護学部									
国際学類	日本文学文化学類		心理学類	国際学類	日本文学文化学類				心理学	こども発達学科	服飾造形学類	家政福祉学類	服飾造形学科	健康栄養学科	家政福祉学科	看護学科				
英語文化コミュニケーション専修	国際社会専修	日本語表現専修	看護専修	文化芸術専修	心理学専修	英語文化コミュニケーション専攻	国際社会専攻	日本語表現専攻	日本文学専攻	看護専攻	文化芸術専攻	/	/	服飾造形学専修	家政福祉学専修	/	/			
0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.9%	1.8%	0.7%	1.2%	0.3%	0.8%	2.8%	2.3%	0.1%	0.1%	1.8%	5.5%	2.8%	1.1%	22.4%
4年生														4年生計						
人文学部			家政学部																	
心理・社会学類	国際学類	日本文学文化学類				心理学類	こども発達学類	服飾造形学類	健康栄養学類	家政福祉学類										
人間発達学専修	英語文化コミュニケーション専修	国際社会専修	日本文学専修	日本語表現専修	看護専修	文化芸術専修	心理学専修	こども発達学専修	服飾造形学専修	健康栄養学専修	家政福祉学専修									
0.1%	0.6%	0.4%	0.5%	0.9%	0.2%	0.3%	0.8%	3.0%	1.0%	2.7%	1.4%						11.9%			

図表 II-1 生活関連アンケート回答者



図表 II-3



図表 II-2

1年生															1年生計								
人文学部			国際学部		家政学部			看護学部															
日本文学文化学科	心理学	こども発達学科	英語コミュニケーション学科	国際学科	服飾造形学科	健康栄養学科	家政福祉学科	看護学科															
4.9%	3.2%	3.6%	2.5%	2.9%	3.3%	6.4%	5.3%	4.5%						36.6%									
2年生															2年生計								
人文学部			人文学部						家政学部			看護学部											
国際学類	日本文学文化学類	心理学類	国際学科		日本文学文化学科				心理学	こども発達学科	服飾造形学科	健康栄養学科	家政福祉学科	看護学科									
英語文化コミュニケーション専修	日本語表現専修	心理学専修	英語文化コミュニケーション専攻	国際社会専攻	日本語表現専攻	日本文学専攻	文化芸術専攻	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	29.3%				
0.0%	0.0%	0.1%	2.2%	2.3%	0.1%	0.0%	0.1%	4.5%	2.2%	3.4%	2.4%	4.8%	3.2%	4.1%									
3年生															3年生計								
人文学部			人文学部						家政学部		家政学部			看護学部									
国際学類	日本文学文化学類		心理学類	国際学科		日本文学文化学科				心理学	こども発達学科	服飾造形学類	家政福祉学類	服飾造形学科	健康栄養学科	家政福祉学科	看護学科						
英語文化コミュニケーション専修	国際社会専修	日本語表現専修	看護専修	文化芸術専修	心理学専修	英語文化コミュニケーション専攻	国際社会専攻	日本語表現専攻	日本文学専攻	文化芸術専攻	/	/	服飾造形学専修	家政福祉学専修	/	/	/	/	21.9%				
0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.1%	0.1%	0.9%	1.7%	0.7%	1.2%	0.3%	0.7%	2.9%	2.3%	0.1%	0.1%	1.7%	5.1%	2.8%	1.2%				
4年生															4年生計								
人文学部						家政学部																	
心理・社会学類	国際学類	日本文学文化学類				心理学類	こども発達学類	服飾造形学類	健康栄養学類	家政福祉学類													
人間発達学専修	英語文化コミュニケーション専修	国際社会専修	日本文学専修	日本語表現専修	看護専修	文化芸術専修	心理学専修	こども発達学専修	服飾造形学専修	健康栄養学専修	家政福祉学専修						12.3%						
0.1%	0.6%	0.5%	0.6%	0.9%	0.2%	0.3%	0.8%	2.9%	1.0%	2.9%	1.5%												

II 学生生活アンケート結果（総論）

1. 学生生活アンケートの実施に当たって

今回の2020年度は、COVID-19の感染拡大により、大学内で授業が通常通り行われていない状況下での調査となった。COVID-19まん延の影響の詳細についてはV章で取り上げる。学生も教員も経験したことのない遠隔授業の実施、大学への登校自粛、学生生活の停止など、学生が大学や大学生活に対して大きな不満足を抱える中での学校運営となり、このアンケート結果がどのようになるのか想像できない状況であったが、このような時こそ学生の声に耳を傾けるべき、という大学評議会の決定を受け、前回と同様のweb上の教育支援サービス「manaba course（以後マナバ）」を利用して実施した。ただし、COVID-19まん延の影響によりサービスを停止している内容は質問しないなど、アンケート内容には配慮した。回収率は約60%で、前回（2018年度）の回収率の約50%と比較して10ポイント増加した。これは、2018年度とは異なり、学生全員が遠隔授業のためにマナバを日々利用している状況にあること、COVID-19まん延の中で学生が自分の考えを大学に伝えたいという意識が高かったことなどが影響しているものと考えられる。

マナバでのweb回答では、無記名での回答はできないため、前回同様、アンケート回収後に教学関連と生活関連の2つのデータを統合させて以降のデータからは、回答者の学籍番号と氏名のデータはすべて削除し、無記名データとして扱った。なお、前回まで紙媒体で実施していた悩み・ハラスメント関連のアンケートは、登校学生が平常時に比較して少なかったことから、今回は実施しなかった。

2. 教育内容から見た大学の問題と課題

(1) 「教育目標の認知」と「カリキュラムの合致度」

所属する学科の教育目標を「知っている」者の割合は、前回の85.4%から、今回は56.7%と大きく減少した。明確な理由は不明であるが、2020年度はCOVID-19感染拡大の影響から、学内での対面授業は限定され、自宅で個別に受講する授業形態になり、大学での学生間、学生と教員間のコミュニケーションが途絶えたこと、授業以外の学びのプログラムがすべてキャンセルされたことが影響しているのではないかと考える。再びキャンパス内での自由な学生生活が復活した際の結果を見守る必要がある。

一方、「カリキュラムの合致度」では、カリキュラムが自分の学びたいことに「合っている」者の割合は、前回の78.8%を上回る82.2%であった。前回同様、こども発達学科(88.2%)、健康栄養学科(87.5%)が高く、他の学科も概ね80%を超え、徐々に増加している。資格取得のためだけでなく学科のカリキュラム構成についても、学生に受け入れられてきたことが窺われる。

(2) 勉強の目標とその取り組み状況

勉強の目標が「はっきりしている」者の割合は、前回の 66.1%から 69.4%へとやや増加した。看護学科とこども発達学科は 80%以上で、資格取得を目指す明確な目標を持っている。心理学科、国際学科では 60%以下と低い。服飾造形学科、家政福祉学科は 60～70%程度であるが、前回からの増加傾向が顕著である。いずれの学科も、1 年生では高く、2 年生で低くなり、3 年生、4 年生と再び高くなる傾向がある。その目標に向かって「よく取り組んでいると思う」と自己評価している者の割合は、前回の 51.8%とほぼ同様の 52.4%であった。4 年生で高い傾向にあり、こども発達 4 年生では 80%、英語コミュニケーション専修 4 年生では 72.7%と特に高い。学年が上がると、専門科目や専門ゼミ、卒論の研究室配属などが進み、教員と近い関係で、双方向で行われる大学特有の学びが、学生の勉強の目標を明確に形成し、その目標に向けてよく取り組んでいる様子が窺われる。

上記 (1) と (2) に示されているように、カリキュラムの合致度、勉強の目標の明確さ、満足できる取り組み、などでは上昇傾向が確認できたが、これらはもちろん教育する側の努力の結実として認められる部分はあると言えよう。ただ、COVID-19 による教育をうける側の勉強の時間の増加も影響しているように考えられる。もしそうであるならば、COVID-19 が過ぎた後もこのような流れが定着できるように、状況を詳細に分析し対応を検討しなければならない。「教育目標の認知」が前回に比べ 30%近くも低下したことも COVID-19 によるところが大きいと思われ、この 3 項目との関連で詳細な分析を行う必要がある。

(3) 科目群別授業の満足度（文章の中の率は受講していない者を除いて算出）

全体での専門科目（講義）の満足度（満足している者の割合）は、74.6%（前回 76.2%）、専門科目（ゼミ・卒論・実習等）は 70.8%（同 69.7%）と、COVID-19 まん延の影響は現れず、概ね良好な満足度が得られた。講義科目について、英語コミュニケーション学科、服飾造形学科、家政福祉学科では 80%以上と高く、看護学科は 57.4%と低い。看護学科は前回（1 年生のみ）の 67.2%と比較しても約 10 ポイント減少している。ゼミ・卒論・実習等の科目について、心理学科と健康栄養学科は 80%以上と高く、看護学科は 55.9%と低い。特に、看護学科の 1 期生が初めての病院等への臨地実習中のアンケートとなった 3 年生では 47.6%と全学科学年中で最も低い結果となった。実習科目の指導と運営について改善が必要である。4 年生の満足度が 90%以上の英語コミュニケーション専修、健康栄養学科、80%以上の心理学科、服飾造形学科では、卒業論文（研究、制作）の指導への満足度が高いことが窺われる。一方、日本文学文化学科は 52.8%と、同学科他学年の 60～70%に比較しても低いことは、卒業論文（研究、制作）指導の運営について改善が必要であることが窺われる。

共通総合科目の満足度は、基礎教養科目（人文・社会・生活・人間科学）は、前回の 61.7% から 69.5%へ、和洋アビリティーズ（基礎ゼミ・キャリアデザイン・パソコン関連科目）は前回の 56.5%から 70.4%へ、外国語科目は前回の 56.7%から 65.9%といずれも増加した。専門科目の満足度に比較すると低い傾向にあるが、授業ごとに実施されている受講生による授業評価アンケートにおいては、2020 年度現在、専門科目と共通総合科目の評価結果にほとんど差が認められない。外国語科目（英語）は、2020 年度、すべて遠隔授業で運営された。後期は大学のネットワークの改善により、遠隔リアルタイムで実施できる Zoom を導入した結果、対面で実施していた前回に比較しても、高い満足度が得られた。さらに、共通総合科目では、これまで、受講希望者が多数のために「抽選」となり、希望通りの受講ができないことが影響して不満が多かったが、2020 年度は、遠隔授業での対応や、登校を希望しない学生も多く、抽選がほとんど行われなかったことが、満足度を上げた原因の 1 つであると考えられる。

科目群の視点での満足度をまとめると、前述のとおり、遠隔授業の導入による大きな満足度の低下は確認できなかったが、遠隔授業の満足度をオンデマンド方式と、リアルタイム方式に分けて訊いた結果では、全体の満足度はそれぞれ 45.7%、46.7%と半数以下である。不満足は 27.1%、25.1%と満足の者より少ないが、一定数いる。初めて取り組んだ遠隔授業への評価として認識し、遠隔授業の質の向上にも取り組む必要がある。

以上、授業科目の満足度に関してまとめた。授業への満足度は、教員の授業運営の良否に依存することは明らかである。2020 年度、授業運営に多大なる時間と労力を費やし、試行錯誤して遠隔授業により学生へのアプローチを継続し続けた教員の努力に敬意を表す。学生が判断した授業科目への満足度は、教員の努力を理解し、教員からの web を介した授業内容を受け取り、制約された中で学び続けている学生の心遣いの表れでもある。学生の皆さんの学びへの取り組みと心遣いにも深く感謝する。

3. 大学生活についての評価結果からみた大学の問題と課題

(1) 授業以外の学習時間

前回に引き続き、授業以外の学習時間を訊ねた。1 日に「1 時間以上」学習時間のある者の割合は、80.5%と前回の 57.2%を大きく上回り、さらに、前回は学科による差が大きかったが、今回の調査では学科による差はほとんど認められなかった。COVID-19 禍以前の 2019 年度に文科省により実施された「全国学生調査（試行）」の「週に 6 時間以上の授業に関連した学習時間」のある者の割合 33%と比較しても高い。「あまりしない」4.5%も、前回の 13.7%と比較しても、「全国学生調査（試行）」の「週に 0 時間」の者の割合 9%と比較しても低かった。遠隔授業の導入は、自宅での学習時間の増加に大きく影響し、多くの学生が自己学習の習慣を得たことが窺われる。今後、遠隔授業が少なく

なり、対面授業に戻った場合の学生の学習時間について注視していく必要がある。

(2) ICT の活用

パソコン（PC）等の保持と利用について訊いた。2019 年度までは、大学に学生が自由に使用できる PC を数多く揃えていたが、COVID-19 禍の影響により大きく方針を変更し、学生個人が PC やタブレットを準備して遠隔授業に取り組んだ。大学は 6 月に 1 人 5 万円の支援金を全学生に配布して準備を促したが、本アンケートの自由記述欄には、入学決定後の大きな方針転換から、その費用負担に関する苦情や指摘などが多数、書かれている。2021 年度の入学生には、PC とネットワーク環境の準備を入学前から知らせている。

看護学科は COVID-19 禍以前よりタブレットを全学生に貸与しているため 100%がタブレットを保持している。国際学科の 1 年生にはタブレット購入を推奨したことから、98.1%が保持していた。その他の学科、学年ではタブレットの保持率は低い。PC は、98.6%の学生が家族との共有も含め、自宅に PC を揃えて遠隔授業を受講していた。前回の 95.2%と大きく変わらないが、自分専用の PC の保持率は、前回の 45.0%から今回の 72.1%へと大きく増加した。現在、学内には PC 教室以外の場所への PC 設置を停止し、ネットワーク環境の増強を進めており、学生が各自の PC やタブレットを持参して学内ネットワークに繋いで学習できる環境づくりに取り組んでいる。COVID-19 禍が収束した後も、学生が各自の PC やタブレットを利用して学内で学習できる方針は変わらない予定である。スマートフォン（以後スマホ）の保持率は、前回と同様に 99.7%であるが、1 日に 4 時間以上利用する者は、前回の 67.3%から、今回の 85.9%と大きく増加し、遠隔授業やステイホームの影響が現れている。

教育支援システムのマナバについて、COVID-19 禍になり原則このコースを用いて授業運営しているため、学生の利用率は前回に比較して大幅に増加した。前回、週に 5 日以上利用する学生は 8.9%であったが、今回は 71.7%となった。一方、大学と学生の連携 web ツールであるポータルサイトの利用については、週に 5 日以上確認する学生は 15.4%に留まり、ポータルサイトからの学生への情報伝達が滞る原因となっていることも明らかとなった。今後、教育活動も含め、大学と学生を繋ぐ web システムについて、大学としてどのようなシステムを構築し、学生教育、システム運用していくのかなど、時代に合わせた ICT 環境の更新について、専門的に考える必要がある。

4. 事務部署についての評価結果から見た大学の問題と課題

(1) 窓口業務の評価

事務窓口対応の業務の比重の大きい学生支援部各課・室（教務課、ラーニングステーション・教職サポート室（教育支援課）、学生課、進路支援センター）の窓口対応についての学生満足度をみる。「満足している」と「まあまあ満足をしている」の合計割合（満足度）は、教務課は前々回の 60.0%、前回の 69.3%から今回は 75.5%、学生課は前々回の 65.3%、前回の 73.1%から今回は 74.4%と上昇傾向にある。COVID-19 による感染拡大が進む状況下で、授業の多くは遠隔受講、実験・実習の一部は対面受講と併用の受講を余儀なくされ、課外活動の制限等通常の大学生活が送れない日々が続いた。窓口対応も相談人数や時間制限を設ける状況であったが、大きく満足度が低下することなく、逆に上昇傾向がみられる。その理由として、窓口での対面対応ができなくても、電話やメール、manaにて、職員一人ひとりが学生と寄り添い、より丁寧に学生の話に耳を傾け、顔が見えない学生の状況や立場を理解することに努めた成果と受け止めている。教育支援課は COVID-19 の感染拡大防止のため、基礎学力の向上を目的としたラーニングステーションの学生支援の取り組みのほとんどを中止し、教職課程を履修する学生支援のみとなったが、学生満足度は前回の結果と変わっていない。調査対象が進路支援対象の 3 年生、4 年生となる進路支援センターの学生満足度は、前回の 81.7%から 77.9%に、看護学部学生への専従の支援体制が整備されているさとみ館事務室は、前回 89.3%から 84.8%と高い満足度であったが前回に比較して下がった。COVID-19 の感染拡大防止による入構や、対面による対応の制限によることが影響している。

一方、「やや不満である」と「不満である」の合計割合（不満度）は、教務課が前回の 10.9%から 4.7%、学生課が前回の 8.1%から 5.6%に減少した。進路支援センターは 6.4%に増加した。各課（室）の職員は学生目線での対応に取り組んでいるが、それでも対応について不満に感じている学生はいる。学年が進行するにつれて、不満を感じる学生が増える傾向にある。将来の進路について、免許・資格取得、卒業や進級に関わること等、職員との関りが深くなるからであろうと考える。学生の窓口対応は総じて「満足」の傾向にあるが、各職員はアンケート結果に満足することなく、更にサービスの向上に努め、今後も満足度を高められるよう学生に寄り添った学生目線での学生対応を心掛ける。COVID-19 禍で対面ではなく、遠隔による対応や相談も増えたので、その利点を活かした質の高いサポートが提供できるように工夫をする。学生の声はいろいろですべてに応えることは難しいが、学生の声に耳を傾けながらバランスの取れた対応をするよう心がけたい。

(2) 事務方への自由記述から記載

① 学生対応について

a) 学生対応時の「不満」対応について

学生支援部各課・室の窓口対応に対しての学生満足度は、「丁寧である」、「親切である」、「やさしい」との回答も多く、全体的な満足度が上がっている。一方、「入室、利用しづらい」、「怖い、冷ややか」、「事務的、質問に対して人によって回答が違う」、といった指摘が依然ある。学生目線での対応を心がけていることが学生に理解してもらえないところもあり残念である。規程等のためにそった指導を、学生が「断られた」、「怒られた」と受け止めていることも考えられる。より丁寧な説明が求められている。「怖い、冷ややか」等の指摘については、真摯に受け止め、職員一人ひとりが自分自身のこととして取り組んでいく。職員の学生支援についてのスキルアップと、引き続き、学生が相談しやすい雰囲気作りに取り組んでいく。対応の違いや不公平感につながらないように、全体で共通認識を図る。COVID-19 禍で多くの制限がある中、対面の対応と遜色ないように、各事務局は遠隔による支援を工夫し学生に情報発信をしてきたが、学生へのメッセージが不足していたり、学生からの問いに対して返事が遅れたり、遠隔による支援の難しさを感じた。遠隔による支援体制についても再度検討を進めたい。

b) 見守りの必要な学生の対応について

前回の調査では、保健センター・学生相談室・ユニバーサルサポート推進室（以後 US 室）の学生利用頻度は学生全体の約 40%であったが、COVID-19 の感染拡大防止により学生の入構制限を行ったため、「よく利用する」、「時々利用する」の合計割合（利用頻度）は 5.4%に留まった。利用者の内、「満足している」と「まあまあ満足をしている」の合計割合（満足度）は、56.2%であった。学生入構制限期間中も学生相談室のカウンセラーとの面談を特例で予約相談は実施、WEB 会議システムによる相談や電話やメールに相談も実施した。COVID-19 禍においても、見守りの必要な学生に対する教員へ教育的配慮の依頼や、悩みを抱える学生の情報を、学生相談室のカウンセラーと担当教員そして職員の間で連携を密にしてきた。これらの対応が奏功し、悩みを抱える学生も、連携された支援の受けながら、修学と悩みのバランスをとりつつ学びを促進させ、単位修得を達成している。引き続き、見守りの必要な学生について、学修活動の継続を目標に全学的な協働により学生支援に取り組んでいく。調査の結果から、利用しづらさを感じている学生もいる。今後、大学生活が正常化に向かうと利用者が増えることが予想される。学生はもちろん、教職員にも保健センター・学生相談室・US 室についての役割や内容を詳細に伝える、支援について基本的なあるべき対応を再確認する。少数ではあるが支援が必要な学生を救うことこそが、大学の力と考える。

②施設・設備について

a) 学術情報センターについて

図書館の利用頻度は、過去の調査では約70%の学生が「よく利用する」、「時々利用する」と回答、約30%の学生が「ほとんど利用しない」と回答があったが、今回の調査ではその割合が入れ替わった。これはCOVID-19の状況下での図書館の利用時間の制限に起因している。図書館の満足度は、過去の調査と同様に学生満足度についての回答は約72%と総じて高い。その反面、「ほとんど利用しない（含む無回答）」の回答が約30%近くあることから、引き続き、学生の図書館の利用率を上げることを検討する。感染状況が改善している現在、図書館に滞在できる利用時間の制限は解除され、感染拡大防止策を遵守しながらサービスを拡大しており、登校している学生による図書館利用が促進している。今後も感染防止対策とサービス向上の両立を目指す。図書館等の学習スペースについて不足しているという意見もあったが、増改築によるスペース確保は容易ではないため、現存するスペースの再周知や、学習スペースの環境整備向上を検討する。

b) 施設整備について

過去の調査からの施設に対しての改善要望を受けて、トイレの洋式化等改善を順次行っている。学費や施設整備費免除の意見が散見されたが、学費は、学位を取得するまでに必要な金額を4年間に分割して納付していただいている。感染拡大防止を目的として、さまざまな形態で授業が実施されても、学費は変わるものではないこと、また、施設設備費は、大学の施設維持・管理経費を目的に徴収している費用で、何年度の入学生はどの建物や設備の費用を負担するものではないことを理解いただきたい。同時に、学生から徴収した貴重な財源を計画的に有意義に活用できるよう予算化し、学生により良い環境を提供するため施設改善に努めていく。そのためにも、学生生活アンケートにより得られる学生の意見や指摘を真摯に受け止め、大学改善への重要な端緒としていく。